

あきぜみ

秋蝉

一

秋の学期が始まって間のないある日のことでした。吉田先生は、直たち六年生のみんなに、明日から中学へあがる者の試験準備に、授業後二時間ずつ補習ほをすると話されました。

「中学へ行く人は手を上げて。」と先生が言われたとき、直は無意識いしきに手を上げました。直は、自分の家がお金持ちでないことをよく知っていました。お父さんやお母さんから、上の学校へ上げてやると言われたことは一ぺんありません。でも直は、いくら家がびんぼうだって中学ぐらいはやってもらえることと思いいこんでいました。

直は後ろの席をふりかえって、やはり手を上げている仲よしの敏ちゃんとしと目を見合わせて、にっこりしました。

「じゃあ、中学へ行かれるか、行かれないかまだ分からない人。」と先生が言われますと、三人ばかりの子が手を上げました。後は高等科こうとうかへ行く子や、六年だけで学校を下りおて家の手つだいをする子たちでした。

直が家へ帰ると、お母さんは土間で機はたを織おっていました。直は学用品やスポンジボールをねだるときと、さほど変わらない調子で「お母さん、ぼく中学へ行ってもいいの？」と聞きました。

「ぜいたくは言いつこなし。」

お母さんは、箴おきを動かす手を休めもせず無造作むぞうさに言いました。

「——どうして？」

「家うちみたいにびんぼうな上に子どもがどっさりある家で、お前一人だけを上の学校など

機：織り機

箴：織り機に使う道具の一つ

へやれるものかね。」

「だって敏ちゃんだって行くんじゃないか。」

「敏ちゃんは敏ちゃん、お前はお前ですよ。」

長男のお前は早く仕事について、お父さんやお母さんを安心させてくれなきゃだめよ。」

直は、いつまでもぐずぐずすねていました。お母さんは、しまいには額ひたいに青すじを立てて直をにらみました。

「六年にもなって何て分からない子だろう。お母さんの言うことがむりか、お前の言うことがむりか、お父さんが帰ったら聞いてみるがいい。」

お母さんはこう言ってしまふと、また、ボタンボタンと機はたを織おり出しました。直はカ



パンをかけたまま、お母さんのそばにぼんやりつつ立っていました。

「なぜぼくは、先生が中学へ行く人と聞いたとき、よく考えもせず手なんぞ上げたんだろう。まだはつきり分らない人と聞かれたときに手を上げりやよかったのに。」と、直はこうかいしました。明日学校で先生や敏ちゃんに何て言いわけしたらいいでしょう。「いつそ、中学なんでものがなけりやいいんだ。そうすれば、こんなつまらない思いをしなくてもすむのに。中学ばかりじゃない、先生も敏ちゃんも、お父さんもお母さんも、みんないなけりやいいんだ。」と、こんなことも考えました。

夕方、お父さんが村の役場から帰ってきますと、お母さんは、お父さんに直のことを言いつけました。お父さんは古ぼけたセルのはかまをぬぎながら言いました。

「直、お前は小学校を出たら、町の時計屋へほうこうに行くことに、もう決まってるんだよ。」

「直は手先が器用きようだから、時計屋ならもってこいだわ。」と、お母さんも調子を合わせ

セル…うすいウ
ールの生地

ほうこう…働く
こと

ました。

「いやだ、時計屋なんか。」

直は、こうどなるなり、ふいとおくの部屋へ入りました。でも、いくらいやだと言いはったところで、もう話が決まっているとさえ、どうしても行かなければなりません。

直は、いつかお父さんと町へ行ったとき、一けんの時計屋の前を通ったことがありました。せん水鏡すいきようを半分にしたような眼鏡めがねを片方かたの目にはめて、ピンセットみたいなものを耳にはさんだ、若い店わかの者がせつせと仕事をしていました。

「ぼくの行くのは、あの店じゃないかしら。」と直は思いました。

「時計屋なら、どっさり時計があるから、ぼくが行けば、きっと一つくれるだろうな。どんな型のだろう。丸いのかしら。ぼくは吉田先生きちだのしてるみたいな四角なのがいいな。」

こんなことを考えているうちに、今までのめいった気持ちきもちが、少しずつほぐれていく

ような気がしました。

二

あくる日、直は学校で敏ちゃんに、自分が時計屋へ小僧こぞうに行くことを話そう話そうと思っ
ていましたが、その場になると、なぜか言いそびれて、とうとう話さず
にしまいました。授業が終わると、直はみんなといっしょに補習ほの仲間へ入りました。どうせ中学
へは行かれないにしても、補習ほだけはしておこう。先生に話すのは、もつと後でもいい
と思ったからです。でも直は、敏ちゃんや先生をだましているような気がしていやでた
まりませんでした。

そのあくる日の昼休みするとき、組中のみんなはこんどの卒業の記念に、学校の裏うらのお
城山しろから何かいい木をほってきて、校庭へ植えようと相談しました。みんなは、小使室こつかいしつ
からくわだのすきだの、いろんなものを持ち出してお城山しろへ上りました。直は敏ちゃん
と二人で、山の頂上ちようじようの、むかし御天守ごてんしゆのあったあとへ行きました。そこには御天守の

小使室…学校で
雑用をする用務
員さんの部屋

御天守…お城の
一部。

屋根のかわらのかけらの古ぼけたのなどが、あちこちにちらばっていました。

「直さん、ごらんよ。中学の屋根がよく見えるよ。」と、敏ちゃんは、にこにこして遠くを見つめています。

直は、今のうちに、敏ちゃんに何もかも話そうと思いつきました。

「ねえ、敏ちゃん。」と言いかけようと思いますと、敏ちゃんは、くるりとこちらを向き
ました。

「直さん、あのね、昨夜、ゆうべぼく中学へ通うようになったら、自転車を買ってくれたってね
だったの。家うちの人は、直さんも買うのなら買ってやるって言うんだけど、君だって買っ
てもらおうだろう。——ね、ぼく一人買ったって、君が買わなきゃ、つまらないもの。」

そう言われると、直はひとりでに「うん。」とうなずいてしまいました。敏ちゃんは、

「ばんざい。じゃあ、二人でいっしょに、自転車で通おうね。」と、晴れ晴れした声で
こう言って、また中学の方へ、うつとりと目を向けました。直は、敏ちゃんが世界中で

一とうしあわせな人のような気がしました。

どこかで秋蝉ぜみが、カナカナカナと鳴き出しました。じつと聞いていると、泣き出したくなるようなさびしい声です。と、敏ちゃんが、こちらを向いて、

「ほら、直さん、みんなが向こうでさわいでるよ。きつといい木が見つかったんだろう。行こうよ。」と言って手をひっぱりました。敏ちゃんは、へんにしよげている直の様子に気がついて、どうかしたのと言うように顔をのぞきこみました。直は、顔を上げて、何でもないようにわざと笑いながら、

「ほら、敏ちゃん、秋蝉ぜみが鳴いてるよ。」と、声のする方へあごを向けました。

「ああ、鳴いてる鳴いてる。」と、敏ちゃんはにこにこしながら、直のかたに手をかけて声のする方を見つめました。

